山谷のホスピス、2つの映画に

きぼうのいえ施設長 山本雅基さんに聞く

2002年10月、東京の日雇い労働者の街（通称）山谷に、誰もが実現不可能と思っていた身寄りのない人々のための在宅型ホスピスケア施設（特定非営利活動法人（NPO）きぼうのいえ」を開設した人がいる。

開設から8年を経た今、「きぼうのいえ」の働きは広く知られるところとなり、このたび2つの映画に描かれて、現在上映中である。理事長兼施設長の山本雅基さんにお話を伺った。

――映画に描かれた「きぼうのいえ」

山本・偶然にも時を同じくして、「マザー・テレサと生きる」（監督・千葉茂樹、企画・女子パウロ会）と「おとうと」（監督・山田洋次、監督・主演・吉永小百合、笑福亭鶴瓶）に「きぼうのいえ」がホスピスのモデルとして取り上げられました。「マザー・テレサと生きる」は、マザー・テレサ生誕100周年に際して制作された映画です。マザーは来日時に、真っ先に山谷に来て、「あなたたちはインドに来る必要はありません。豊かな日本でも山谷のようなところでは、道端に倒れ、家がない、着る物がない人がいます。日本でコルカタ（カルカッタ）を探しなさい」とメッセージを残されました。私はこの言葉に大きく突き動かされて、マザー・テレサの「死を待つ人の家」を原型にして、「きぼうのいえ」を建てました。

日本で山谷にいる人は、家族に捨てられた経験など故に、人を信じ、共に生きることが困難になるような複雑な過去を持っている人ばかりです。この映画制作にあたり、いきなり見知らぬ人が撮影するのは至難の業ではないかと思ったカメラマンさんは、事前に1ヶ月間ボランティアとして来て働き、皆さんとも顔なじみになった後で収録をしてくれました。ちなみに彼は、この映画の後、「きぼうのいえ」に魅了されてカメラマンを辞めてここのスタッフになってしまいましたが（笑）。

一方の「おとうと」は、誰からも顧みられない人に焦点を当てています。親戚にも一人くらいはいるであろう、周囲と馴染めず、場を壊してしまい、好き勝手に振る舞ってしまう人。こういう人が最期を迎える時、一度は縁を切った家族が、最期の場面で和解し合い、看取りをするシーンを描ける病院を探していた監督が、「きぼうのいえ」について描いた『大いなる看取り』（新潮社刊）『山谷（現在は『山谷でホスピスやってます』として新書化。いずれも実業之日本社刊）に出会い、ここを収録現場に選んでくれました。

愛情のシャワーを浴びせる

――開設から現在に至るまで

山本・2002年に開設した「きぼうのいえ」は、毎年20人弱の方々を看取ってここまできました。2008年には長野に墓地を購入し、「きぼうのいえ」だけではなく、「山谷の人の墓地」にしました。「きぼうのいえ」に入居できなかった人たちが、「自分たちは生きていてもホームレス、死んでからもホームレスだ」と嘆くのを聞いたからです。

本当に悲しい過去を負った人がたくさんいます。薬を勧めた時に、製薬会社からのキックバックを疑われたことがあります。腹が立つこともありますが、入居者一人ひとりに向き合ってその人生を丁寧に聞いていくと、こういう目にあえば人を信じなくなるし、呪うようになるだろうと思います。自分の人生、無作法な振る舞い、人生の道のり、家族、命を与えてくれたものとの和解、といったことをしなければ、良い死は迎えられません。スタッフに罵詈雑言を繰り返す入居者に対しては、愛情のシャワーを浴びせるしかないと思います。

やまもとまさきさん。1963年栃木県生まれ。1995年上智大学神学部卒業。2002年に在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」（全21室21床）開設。2009年には法人名を「特定非営利活動法人（NPO）きぼうのいえ」に変更。現在は講演活動でも多忙を極める。講演内容はhttp://www.kibouno ie.info.yamamoto_masaki.html

「皆さんに感謝。私は喜んで前に向かって死んでいきます。この世の生命を終えた後、どんな人生が待っているのかと思うと死ぬのが愉しみです」と言って亡くなった人がいました。最期の時間、自分と向き合い、和解していくことで、どんなことを悟ったのかと思うと本当に不思議な気持ちです。

中でも、もの凄い暴言を繰り返していた人が、ある時、聖家族礼拝堂（「きぼうのいえ」内の礼拝堂）で誰かに肩を叩かれる体験をして神の臨在を知ってから、すっかり変わってしまった事例があります。彼は、「（きぼうのいえが）できた時には、また自分たちには関係ない福祉施設ができたと思っていた。ところが、ここに入っていく知り合いを見ていると、スタッフに手を引かれながら、買い物や散歩に出かけていくのが見かけられるようになった。そして、亡くなったときには立派な霊柩車が来て、皆で出棺して、霊柩車が見えなくなるまでいとおしそうに見送っているのが見えた。自分たちにももしかすると幸せな最期があるかもしれないという希望が生まれた。

きぼうのいえは山谷における光の発信地となっている」と語ってくれました。本当に大きな励みとなる言でした。

神様は、神の国を実現するのに自らの手を用いません。何故か自分のみ旨を行う人を探していて、その気持ちを汲んでくれる人を見つけるやいなや、恩寵を贈ってみ旨を実現なさるのです。

私はたまたまそれに出会ってしまったのでしょう。

試される人間力

――試される人間力・変わらぬ山本夫妻の信念の奥にあるもの

山本・いわゆる「常識」が通用しないおじさんたちは、感謝ではなく、悪態をつくことでしか自己表現できません。

愛情を求めているのにそれを表現できず、また与えられた愛情に応えるすべがない人たちの背景を理解して接する困難を日々感じます。ですが、一人ひとりに向き合い続けていくという当初からの信念を貫くためには、力まないこと、ぶれないことが大切だと思います。そのためのポイントは、やはり自分が取るに足らないものだと自覚することです。

山谷の人たちの隣人になるというよりは、もう一人の自分に出会うという感じでしょうか。彼らは自分の弱い部分が前面に出た人たちなのです。

強さにおいて連帯する、というのは昔の組織論ですが、それは弱い者は切り捨てるということですから簡単です。でも、弱さにおいて連帯するというのは大変なことです。情けなければ情けないほど、自分の弱さが投影されているわけですから、切り捨てることができません。聖書に「弱いからこそ強いのです」というのがありますが、こういうことなのかもしれないと思います。施設長は映画で言うところの監督です。舞台には載らないけれど、誰よりも鋭く演技指導ができて、洞察力があって、卓越した視点を持って、的確に言い当てなければなりません。

いざという時に出て行く、これが私の役割だと思っています。聖書と現代は一致しています。人間の裏切り、他者への呪い、それに対する愛や福音…。それが詰まっているのが、「きぼうのいえ」の日々だと思います。

山谷全体をホスピスに

――ヘルパーステーションという新たな試み

山本・現在、「きぼうのいえ」に入居できずにいる人は3500人にも及びます。入居できるのはわずか1パーセント。99パーセントの人に対して自分は知らないふりをできるのか、という問いを突きつけられました。「きぼうのいえ」を100軒建てるのは、物理的にも経済的にも不可能です。そうだとしたらマンパワーを利用しようと思い立ち、2年前から山谷にヘルパーステーションを開設しました。現在は30人ほどのスタッフがホームヘルパーとして訪問しています。私は4年前に『山谷でホスピスはじめました』という本を書きましたが、今では、山谷全体をホスピスにしたいと思っています。「きぼうのいえ」で信念や哲学、理念を学んだ人を派遣して、山谷のような貧しさと悲しみと涙と恨みの渦巻く街から神の愛がこういうところに実現するというサンクチュアリ（聖地）を実現したいという壮大な夢を持って、このミッションの実現に向けて頑張っています。

＊マザー・テレサ映画祭は3月20日から4月11日まで。東京都写真美術館ホールにて開催。問い合わせ03－3280－0099（同美術館）

＊本文中の「きぼうのいえ」に関する書籍は聖公書店で取り扱い中。（電話03－3235－5681）